

園長だより NO105



2024.10.8

長い夏がやっと終わりを告げるようです。残暑が続き、夏バテはピーク、心地よい秋に期待し疲れを少しでも緩和していければと思っています。

子どもの命を守る

先月の便りで「こども、まんなか社会」こどもの権利と尊厳にふれました。

私は時折、本棚から思い出しては読む本があります。自分の記憶から風化させないために手に取り読みます。2011年に発売されたものです。当時、保育に携わっていた方は大きなショックを受けた事件、その全容を綴ったものです。

「死を招いた保育」— 上尾保育所事件の真相です。当時はメディアでも取り上げ、ニュースで事件を知った。2005年8月、当時幼稚園で勤務していた私は夕方のニュースで事件を知り、大切な子どもの命が亡くなったことへの動揺、加えて保育園のずさんな管理体制や劣悪な保育が子どもを死に追いやったことへの怒りの感情が胸を膨張させた。

事件は平成17年(2005)8月10日埼玉県上尾市立上尾保育園内で起きた。当時4歳の榎本侑人君が本棚の下の戸のついた収納庫に入り、熱中症で死亡しました。両親は「なぜ我が子は亡くなったのか」という事件の真相

が知りたいと願ひ民事裁判を起こしました。

2年以上にもわたる裁判でも侑人君が本棚になぜ入ったかについてはわからなかった。安全に過ごせるように努めている保育園のできごと、保育所の中にいたにも関わらず本棚の中に入った瞬間を一人の大人もみていなかった。「死を招いた保育」では2年に及ぶ裁判から事実を究明し且つ子どもの命を守る施設の在り方を大いに警鐘している。

裁判で原告側の用意した最終準備書面にはこう書かれていた。「本件事故は、決して不慮の事故ではなく、日常の保育に多くの問題があり、その問題を放置した故に起きた、起こるべきして起きた事故」である。

裁判が進むなかで事件の事故調査委員会の委員長(大学の保育学、臨床発達学の専門家)の尋問調書の中で上尾保育所の保育レベルは「全国レベルには達していなかったと言わざるを得ない」と証言しています。当時の上尾保育所では、子どもひとり、ひとりを大切にすることや命を預かり保育する事において多くの欠損があるという。要するに保育士の専門性が不足しているとも証言されています。

専門性の欠如が子どもの行き場を失なわせる

事件当時、上尾保育所は子ども達が廊下を走ったり、ピアノや窓によじ登ったりと多くの保育者が証言している。そのような落ち

着きのなさが助長し保育をやりにくくしている状態であったという。

委員長は「保育のしにくさ」の原因は子ども達が全力で遊ぶ場所であるべき保育所で子ども達が集中して「遊び込む」ことができるようなものがなかった。保育士たちは「自由保育だから」と子ども達が遊び込めるものを何も与えていなかったと言わざるを得ない。子ども達は所在なく、ふらふらと園内を漂い、自分たちで遊びを見つけるしかなかった。

もし遊びの環境が整っていて保育室で夢中になり遊びに没頭していれば事故など起こっていない。保育士から離れ、保育室から離れ死角となる場所で遊び、死亡事故が起きてしまった。自由保育とは名ばかりで**放任保育**である。子ども達は放任され野放しにされていた事実がある。それこそが「自由遊び」であるとはき違えられていた。保育士の保の字にも値しない保育者集団といえる。

「根拠のない神話」と本来やるべきこと

保育園に入園するなら公立と言われる。現在は影を潜めているが神話めいた都市伝説的な言われがある。現在、不適切保育など報道で取り上げられた民間保育園の影響で民間保育園の評価は下がる。ごくごく一部の不幸事であるものの保育界全体も色眼鏡で見られることも多々ある。

上尾保育所も評判は悪くないと言われていたが可視化できない保育の部分は劣悪な状況が多くを占めていた。「公立だから」保育の質が高いということが完全に打ち消されることとなる。保護者との関係もできていない。保育士同士の関係性も十分ではない。

私は私、我関せず、慣例的に行われてきた保育から新たな保育への挑戦もない。現状に満足していて、普段の努力を積み重ねることを疎かにした結果、痛ましい事故が起きた。

そもそも子どもを預かる施設に民間、公立を区別する必要はない。互いに子どもの心身ともに豊かな成長を保障してあげようと努めている施設に優劣をつける必要があるのだろうか、時代変化と共に保育制度もかわる、子どもの取り巻く環境も変わる。保護者の就労状況も環境も変化していく、子どもの生活の場である保育園をいつも良い循環で維持できる環境を作る必要がある。

「こどもまんなか社会」と国をあげて子どもを支え、保護者を支えることが謳われている保育制度や社会情勢が大きく変化している現在だからこそ「ひとり、ひとりを大切にする保育」を微視的に考え細やかな観点から保育のあるべき姿を考え取り組んでいく。保育現場をどう作っていくのか課題は山積である。

※参考 死を招いた保育 ひとなる書房

(おおぞら保育園 園長 廣部信隆)